

つ つ ま し ゃ

——カスミ草のように謙虚に——

この春のことですが、私は、家のすぐ近くの、広島市立植物公園で開催された「世界ラン展」の観賞に出かけました。広い園内一杯に、馥郁とした香りを漂わせている気品高いランの花は、私たちを幻想の世界へと誘ってくれるほどに素晴らしいものでした。

それにしても、万を数えるランの花を、よくも一堂に集めたものだし、また、よくも一時期に咲かせたものだと感心もしたものでした。温度や光を、人工的に調節して、その生長を促成したり抑成したり、高度の技術革新の時代であることを思えば、それは驚くに及ばないことかも知れません。おかげで、私たちは、どんな花でも、いつの時期にも観賞でき



建設中の総合情報館

る、という時世になりましたが、しかし、季節感を失うことになったことも否めない事実です。

ところで、今年の「母の日」の少し前のことですが、大阪の泉大津のある主婦の方が、「カスミ草で亡き母をしのぶ」という一文を新聞に寄せておられました。カスミ草は、ナデシコ科の一年草で、小さな純白の五弁花をつける春の野草なのですが、今は、四季を通して花屋さんの店先で見かけられますので、季節感を失った花の代表といえるかも知れません。

この泉大津の主婦の方は、関東にお嫁にいつておられるお嬢さんから、毎年「母の日」になると、カスミ草を添えた赤いカーネーションの花束を贈り届けられるのだそうです。とすると、そのカーネーションは自分の机の上に、カスミ草は今亡きお母さんの写真の前にお供えするというのです。そして、その方は、お母さんの生前に、一度も花のプレゼントをしなかったことが悔いられ、胸が痛むと述べておられました。

それにしても、このカスミ草は、決して、自ずからは主役とはならず、カーネーションやバラの花をひき立てるわき役として、ただ彩りを添えるだけというつつましい花だと思ふのです。お母さんの写真の前に、カスミ草をお供えしたというあの主婦の方も

花のカスミ草がわき役で甘んじるように、母もまた、その生涯を、父や私たち子供のわき役で通した。だが、主になる花をひき立てるように、母の存在の大きさは、歳月を経るにつれ身にしみてくる。

とおっしゃっておられます。その通りに、人間もまた、あのカスミ草のようにわき役としてつつましく生きることにこそが、実は、大きな素晴らしい生き方といえるのではないのでしょうか。

老子のことばに、

最上の善とは水のようなものだ。水のよさは、あらゆる生物に恵みを施し、……それでいて、すべての人がさげすむ場所に満足していることにある。これが、（水を）道にあればほど近いものになっている。

というのがあります。これは、水の謙虚さ柔軟さという徳をたたえた文なのですが、これを、山と比べてみれば、一層はつきりすると思います。つまり、山が巍然として高くそびえ四周を睥睨（いげい）しているという感じを抱かせるのに対して、川の水は、常に低きについて流れ、しかも、どんなに汚れた水でも拒まず受け入れて流れるのですが、ここに、謙虚さ柔軟さを感じさせるものがあると思うのです。しかもそれでいて、水は、一度動くとも山をも崩（くず）す大きなエネルギーを内包しているのですから、その芯は、強いと思うのです。

こうしてみますと、この水のもつ謙虚さ柔軟さは、先のカスミ草のもつ奥ゆかしいつつましさ、一脈相通ずるものがあるといえないでしょうか。そして、それらの徳性こそが、老子の生き方の根本にある思想なのです。こうして、人をひき立て、自ずからはその背後に下がってつつましく生きるという老子的この生き方は、余りにも謙虚に過ぎて柔弱さすら感じるかも知れません。しかし、先のあの主婦の方が、お母さんのつつましい控え目な姿勢の中に、かえって大きなものを感じられたように、実は、一歩下がったつつましい謙虚な生き方こそが、真に偉大な人間の生き方ではなからうか、と私は思っているのです。